

御土居の実像－近年の発掘調査成果から－

(公財)京都市埋蔵文化財研究所 南 孝雄

1. 御土居の歴史

天下人となった豊臣秀吉は、京都の町でいくつかの大規模な造営事業を行います。天正 14 年(1586)に聚楽第、天正 16 年(1588)には方広寺、そして天正 19 年(1591)の御土居と続きます。

御土居の造営は天正 19 年(1591)に豊臣秀吉によって行われました。御土居は土塁と堀によって京都の町を囲んだものです。その範囲は近世京都の中心部に留まらず、南は東寺、北は鷹ヶ峰、東は鴨川、西は紙屋川に至り、延長距離は約 23km に達します。当時の記録によると、工事は天正 19 年の閏正月から始まり数ヶ月でほぼ終了するという突貫工事で行われたようです。御土居造営の目的には諸説ありますが、鴨川・紙屋川の治水、外敵の侵入を防ぐ、洛中からの盗賊の逃亡を防ぐ、治安の維持などが挙げられます。

江戸時代になると、御土居は幕府の管理下に置かれ、近世都市京都を構成する重要な施設の一つとなります。御土居の名称は江戸時代になって定着したもので、豊臣期には主に「土居堀」と呼ばれていたのが、江戸時代になると次第に土塁の管理に重点が置かれ「御土居」へと名称が変化していったようです〔中村武生 1997〕。しかし、明治時代になると民間への払い下げなどにより御土居の破壊が始まります。更にそれが本格化するのは大正 8 年(1919)の都市計画法の公布によるものです。これ以降、京都は近代的な都市への変化が進み、更に戦後の高度経済成長期などの開発によって御土居はほとんどが地上から姿を消してしまいます。

しかし、こうした状況に対して、大正 6～8 年に京都府によって現況記録が実施され、御土居の歴史的重要性が注目されます〔西田直二郎・梅原末治 1920〕。この成果を受けて、昭和 5 年(1930)京都市内に残る 8ヶ所の御土居が国の史跡に指定され、御土居の保全が図られました。更に昭和 40 年には北野天満宮境内の御土居が史跡に追加指定されています。

2. 御土居の調査

御土居の調査は、先に述べたように大正時代に京都府によって現況調査が行われたのが始まりで、この時、衣笠村野口町(現北区衣笠北荒見町)では精密な御土居の測量調査が実施されています(調査 1)。昭和 50 年代以降、京都市内の開発に伴う発掘調査体制が整備され、市内各所で発掘調査が実施されるようになると、地中に埋もれていた御土居が姿を見せるようになります。

これまで行われた発掘調査によって 12ヶ所以上で御土居に関連する遺構が検出されていますが、検出されている遺構はほとんどが堀です(調査 2～6・9・10)。各調査における堀の規模は、幅 13

～20 m、深さ 1～2.5 mと場所によって異なっています。堀は各調査例ともに 17 世紀前半から埋まり始めており、この時期から堀の管理が行われなくなり始めたようです。

土塁と堀が検出された調査例もあります(調査 3)。堀の幅は 20 m、深さが 2.5 mを測り、土塁は幅が 20 m、高さは 2 m以上で、上半部は後世の削平により失われていました。埋もれていた土塁と堀が発掘調査された唯一の例です。

また、江戸時代に御土居の一部が破壊されている例もあります(調査 10)。御土居東辺で行われた調査では、18 世紀代には土塁の部分が墓地になっている事が明らかとなりました。寛文 3 年(1663)に鴨川の洪水が京都を襲います。京都所司代いたくらのしげのりの板倉重矩は、寛文 10 年(1670 年)に鴨川の上賀茂から五条通までの間に石積みの堤防、いわゆる寛文新堤を設けました。これによって、この範囲での御土居は鴨川の堤防としての意味が失われ、寺院などに売却されたことと関連するようです〔中村武生 2005〕。

3. 北野天満宮境内の調査

昨年、北野天満宮境内の御土居で整備を目的とした発掘調査が実施されました。地上に残る御土居の初めての発掘調査です。調査地は北野天満宮境内地の北西部に位置し、この境内地の御土居は国指定の史跡に指定されています。調査は、御土居の整備を目的として 6つの調査区を設定して行いました。主な調査成果として次の 3点が挙げられます。

(1) 切石組暗渠を検出しました。埋没して位置が不明であった東側の取水口を調査により検出し、露出していた排水口と合わせ、切石組暗渠の規模・構造が明らかとなりました。この暗渠は、延長 23kmを描いた『京都総曲輪御土居絵図』(元禄 15 年(1702)作成。京都大学総合博物館蔵。以下『御土居絵図』)に描かれた唯一の暗渠にあたります(1・3トレンチ)。

(2) 調査地の御土居は、紙屋川東岸の段丘上に築かれていることが確認され、その規模や基底部から最上部までの構築方法が明らかとなりました(2トレンチ)。

(3) 『御土居絵図』に描かれる元禄 14 年(1701)に開削された切通しの道路を検出しました(2・5・6トレンチ)。

以下にそれぞれについての説明を述べます。

(1) 1・3トレンチで検出した切石組暗渠は北白川産の花崗岩製です。取水口と排水口間の距離が 19.3 m、それぞれ開口部は高さ 40 cm、幅 60 cmを測ります。取水口は天井石(長さ約 100 cm、幅約 70 cm、厚さ約 20 cm)と南北の側石(長さ約 70 cm、幅約 45 cm、厚さ約 20 cm)、底石(長さ約 100 cm、幅約 70 cm、厚さ約 20 cm)を組み合わせて構成されています(暗渠全体が同様の規格の石材を用いて構築されているものと考えられます)。一方、排水口はこれよりも長い石材が用いられており、それぞれ長さが北側石 258 cm、南側石 166 cm、底石 160 cmです。これにより、排水口は土塁本体より数 10 cm突き出すので、バランスを取るために長い石材を用いたことが想定できます。

暗渠は、土塁を盛り上げて構築した後に、これを掘り込み、石組を設置して再び埋め戻しています。

暗渠の設置の年代を示す遺物は出土していませんが、それを考える手がかりとして、排水口の北側石を切り出す際に穿たれた矢穴があります。矢穴の形状は時代とともに変化しますが、このタイプの矢穴は安土桃山時代から江戸時代初期ごろのものです〔森岡秀人・藤川裕作 2008〕。また、方広寺・大坂城・二条城などの石組暗渠との比較からも同様の見解を得ることが出来ます。北野天満宮の切石組暗渠はこの頃に設置されたようです。

暗渠取水口と東から接続する排水溝は、北野天満宮のすぐ北側に位置し（本殿から北へ 25 m）、天満宮の北辺とも方向が合うことから、神域を雨水などから守る為に設けられたものと考えられます。

また、土塁の基底部から最上部までの規模と構築方法も明らかとなりました。土塁は紙屋川の東側段丘上に構築され、基底部幅が約 18 m、盛土の高さは 3.0 m を測ります。紙屋川河原から土塁天場までの高さは約 10 m にもなります。土塁の構築土は、調査地の地山と同種のものでした。御土居の既往調査（調査 3）でも土塁構築土は地山と同種であり、土塁の構築土は、その周辺のものを利用されたと考えられます。

なお、『御土居絵図』は、寛文 9 年（1669）幕府が御土居の管理を角倉与一すみのくらよいちに委託したため、角倉家はその維持・管理を行うために作成した絵図面です〔京都大学総合博物館 2010〕。今回の調査によって、検出された遺構・絵図面・現況地形がそれぞれ合致することが確認され、その精度の高さが明らかとなりました。

4. まとめ

御土居の発掘調査によって、これまでの研究成果を確認したり、新たな事実が明らかになってきました。御土居の堀から 17 世紀前半代からの遺物が出土するということは、江戸時代に入り、幕府の管理が土塁（土居）と堀から、土塁に限定していくというこれまでの研究と合致します。土塁の構築土は、調査地周辺と同種の土であることから、その周辺で採取されたものであることがわかりました。

御土居が築造された目的は、はじめに触れたように諸説あります。鴨川の堤防としての役割は、寛文新堤が造られた後に、河原町沿いの御土居が潰されているという事実からその機能が存在したことが分かります。外敵の侵入を防ぐというのも京都の町とその周辺をすっぽり囲むプランやその形状、また城下町の惣構の存在からも考えられることです。首都・京都の治安維持のためというのは、築造時期が文禄元年（1592）の秀吉の朝鮮への出兵直前ということを考えれば、重要な視点と思われます〔藤井譲治 2011〕。室町時代の京都の町は、複数の町の集合体で、町の中には防御の為の「かまえ構」と呼ばれる堀で囲われていました。この構の堀は発掘調査でも確認されていますが、江戸時代の初頭にはほぼ埋められています。このような町同士を分断する施設は物や人の流れを阻害します。経済発展を重視した秀吉は、御土居の築造により、バラバラの町の集合体であった京都から一つの町の京都への改造を目指したのではないのでしょうか。

<参考文献>

- 市川創 2013「徳川期大阪城の地下施設－特別史跡 大阪城跡の発掘調査成果－」『大阪文化財研究所 研究紀要第 15 号』（公財）大阪文化財研究所
- 馬瀬智光 2009「御土居跡・寺町旧域」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 20 年度』京都市文化市民局
- 京都国立博物館 2001『北野天満宮神宝展』
- 京都新聞社 1972『かくれた史跡 100 選』
- 京都大学総合博物館 2010『御土居絵図デジタルコンテンツ完成記念展覧会 いま、御土居がよみがえる』解説シート
- 小檜山一良ほか 1999「平安宮左馬寮－朝堂院跡・平安京右京一・二条二～四坊」『平成 9 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 小檜山一良 2009『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-1（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 小森俊寛ほか 2002「平安京右京一条二坊」『平成 11 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 近藤章子ほか 2014『平安京左京八条四坊八町跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-11（公財）京都市埋蔵文化財研究所
- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011「平安京左京九条二坊十三町」『昭和 55 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013『北野天満宮 史跡御土居発掘調査 現地説明会資料』北野天満宮・（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 菅田 薫 1991「平安京右京一条二坊」『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 菅田 薫 1995「平安京左京九条二坊」『平成 3 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 高橋 潔・モンペティ恭代 2014『平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-25（公財）京都市埋蔵文化財研究所
- 中村武生 2005『御土居堀ものがたり』京都新聞出版センター
- 中村武生 1997「豊臣期京都惣構の復元的考察－「土居堀」・虎口・都市民」『日本史研究』420 号
- 中村武生 2001「豊臣政権の京都市改造」『豊臣秀吉と京都－聚楽第・御土居と伏見城』文理閣
- 西田直二郎・梅原末治 1920『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊 京都府
- 平尾政幸ほか 2002『平安京右京六条一坊・左京六条一坊』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 平田 泰・吉川義彦・菅田 薫 1984「右京七条一坊」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 丸川義広ほか 1987「平安京左京九条二坊」『昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 丸川義広 1998「一条通紙屋川出土のキリシタン墓碑」『リーフレット京都』No. 118 京都市考古資料館、（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 丸川義広 1997「御土居跡の発掘調査とその成果」『日本史研究』420 号
- 本 弥八郎・木下保明 1986「第 11 次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報 昭和 61 年度』京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 藤井譲治 2011『天下人の時代（日本近世の歴史 1）』吉川弘文館
- 森岡秀人・藤川裕作 2008「矢穴の型式学」『古代学研究－森浩一先生傘寿記念論文集－』第 180 号

表1 御土居年表

天正19年 (1591)	1.16	関白秀吉が「東川原」を実検。前田玄以も同行（兼見卿記）。
	1.18	毛利重政、片桐貞勝、服部正榮が吉田兼見を訪問。「山城之内堤」普請に吉田郷の夫夫を出すよう求める（兼見卿記）。
	1.21	聖護院が新宮興意法親王の剃髪にあたって人足を徴収。しかし「鳥飼堤普請」に京都中の人足が従事しており、集められず（時慶卿記）。
	1.24	吉田家に使者2名来訪。堤普請を予定通り行うことを伝える（兼見卿記）。
	閏1.7	青蓮院が「山城堤普請」の夫役を免除される。青蓮院は礼銭として奉行に五百疋を献上する（華長要略）。
	閏1.11	前田玄以が賀茂惣中〔上賀茂神社〕に対して「河並御普請衆」の寄宿役の免除を傳達する（賀茂別電神社文書）。
	閏1.21	上京の長者町、六丁町のほか、京都のあちこちで屋敷替えが行われる（晴豊記）。
	閏1.22	「山城堤之普請奉行之内衆」が鳥を食す事の裁許を願う（兼見卿記）。
	閏1.24	真如堂の普請が在所中に傳達される。聚楽町在家がことごとく他所へ移転させられ、跡地に聚楽第の諸大名屋敷を建設する（兼見卿記）。
	閏1.25	「京都南川原普請」のため、諸大名の普請衆が上洛する。その数知れず（兼見卿記）。
	閏1.26	前田玄以が西京や北野の者に「大將軍の際、赤土を堀りたる所を埋めさせ」るよう命じる（北野社家日記）。
	閏1.29	「京中屋敷かへ」が行なわれ、町人が家を壊して移住する（晴豊記）。
	2.1	「京都南表普請」始まる。その数数百万人（兼見卿記）。
	2.2	大納言勅修寺晴豊が「京中惣ほり口六十間」の噂を聞く。まだ継続中の「屋敷かへ」を見学し、あたかも乱の如くと表現する（晴豊記）。
	2.3	夕方、勅修寺晴豊が「京中屋敷かへ」を見学し、あたかも乱や焼亡の跡の如くと表現する（晴豊記）。
	2.9	「御ふしん」によって、四条通の祇園口が塞がれる傳達ある。祭礼の神輿が通れないという理由で祇園社が取り成しを依頼する（祇園社記）。
	2.23	西洞院時慶が初めて「京廻ノ堤」を見る（時慶卿記）。
	2.29	伊達政宗京屋敷が「若狭之衆」三千人により普請中。同時に最上義光京屋敷も二〜三百にて普請中（貞山公治家記録）。
	3.6	秀吉が「大堀」となった紙屋川見学のため、北野天満宮の北の寺之内通の高橋を通る（北野社家日記）。
	3.10	河原長右衛門が「洛下四方新堤」の竹奉行を更迭され、毛利高政・毛利重政に代わる（北野社家日記）。
	3.12	相国寺域の竹木の伐採を禁じられる。修理などで伐採の必要がある場合は、竹木の奉行に届けるべきことが傳達され、これを了承する書簡を奉行に送る（鹿苑日録）。
	3.15	相国寺鹿苑院に竹奉行の使者駒井久右衛門ら5名が訪問し客殿にて富春と対面する。鹿苑院は竹木伐採禁令が免除されることを傳達される。相国寺は竹木禁止について訴えるため、前田玄以に菓子箱を、毛利両奉行に弓掛を3具献上する（鹿苑日録）。
	4.25	浅野長吉〔長政〕が滝川忠征に宛てた書状のなかで「洛中惣構御普請」について、「大略出来」だと伝える（滝川文書）。
	5.18	秀吉が賀茂の帰りに「堤」を見るため北野天満宮に立ち寄る。秀吉に従うもの人数12人〔千満主従、宗永左近丞紫竹人足3人〕（時慶卿記、北野社家日記）。
	6.13	北野天満宮の「土居堀」が北野の松梅院に渡される（北野社家日記）。
	9.23	秀吉が土居替地として、北野神社や鹿苑寺、讃州寺などに西院の土地を与える。また大聖寺には吉祥院村に替地を与える（北野天満宮史料、鹿苑寺文書、讃州寺文書、大聖寺文書）。
	10.3	北野神社の小島新平が、西院の替地を受取りに行く（北野社家日記）。
	11.11	三条西小橋が建設される（同擬宝珠銘拓本）。
文禄元年 (1592)	10.1	ルイス・フロイスが本国への通信のなかで秀吉の京都惣構について触れ、その築造理由を「己が名声を記念するために」築いたとする（一六・七世紀イエズス会日本報告集）。
文禄4年 (1595)	4.1	関白秀次の側近駒井重勝が前田玄以に書簡を宛て、多数の土居の枯竹を伏見向島屋敷の桜植木の囲いに使用してはどうか提案する。前田玄以が伐採にあたって検使を遣わすように答える（駒井日記）。
	4.4	枯竹奉行の鷺見善兵衛、一瀬与左衛門、梨形金右衛門が秀次の派遣した上使と合流し土居の枯竹を巡検することとなる（駒井日記）。
	4.9	伐採された土居の枯竹が、佐野某〔範囲は東寺から「すい坂梅道」まで〕へ16,113本、杉山半左衛門と堤大蔵に12,158本渡される（駒井日記）。
	8.31	立売組14町のうち、上柳原町が、土居の「本竹散俵芝手二重目迄」の普請を行い、銀552匁かかる（上下京町々古書明細記）。
	9.13	秀吉が知恩院に対して、「土居堀」の替地として、西院に32石7斗を与える（知恩院文書）。
慶長6年 (1601)		この年、願いにより閉鎖されていた四条祇園口の道が開けられる（祇園社記）。
寛文9年 (1669)		御土居の管理が町奉行から角倉家へ移行される（京都役所方覚書）。

※ 中村武生2001より作成、一部調整。

表2 御土居調査一覧

No.	調査地	調査期間	遺構	遺物	文献
1	北区衣笠荒見町 (旧野口町)	1918年?	土塁を測量。		西田直二郎・梅原末治 1920
2	南区西九条春日町13 (九条弘道小学校)	1980.09.16~ 1980.10.09	堀を検出。幅17.5m、 深さ2m。		財団法人京都市埋蔵文化財研究所2011
3	下京区朱雀堂ノ口町	1982.01.27~ 1982.10.15	土塁と堀を検出。土塁は 幅20m、高さ2m。堀は幅 20m深さ2m。	大量の木製品と共に人骨が出土。	平田 泰ほか1984
4	南区西九条春日町19	1984.05.21~ 1984.10.01		「寛永二十一年」(1644)、「正保四年」 (1647)の記年銘木簡が出土。	丸川義広ほか1987
5	中京区西ノ京中保町 1-4(北野中学校)	1987.10.08~ 1987.11.30	堀を検出。幅は5m以上、 深さ1m。	「天正十三年」(1585)、「慶長□□□□」, 「承應」(1654)、「寛文九年」(1669)、 延カ宝三年(1675)の記年銘木簡	菅田 薫1991
6	南区西九条鳥居口町1	1991.05.01~ 1991.10.17、 1991.11.05~ 1992.03.31	堀を検出。幅14m以上、 深さ2.5m。		菅田 薫1995
7	中京区西ノ京円町地内	1997.09.08~ 1998.02.13	土塁内溝を検出。 幅1.7m、深さ0.3m。		小檜山一良ほか1999
8	中京区西ノ京円町 55-1	1999.11.01~ 2000.03.25	土塁基底部と内溝を検出。 基底部は幅13~14m。 内溝は幅2.0m、深さ0.4m		小森俊寛ほか2002
9	下京区中堂寺南町 地内	2001.01.18~ 2001.04.06	堀を検出。幅12.5m、 深さ1.5m。	江戸時代前半の陶磁器。 寛永通宝20数枚が出土。	平尾政幸ほか2002
10	上京区御車道今出川 下二丁目柴町361	2008.02.25	土塁内溝を検出。幅1.6m 以上、深さ0.6m。		馬瀬智光2009
11	下京区朱雀正会町1 -20	2009.03.09~ 2009.04.30	土塁基底部の一部を検出。		小檜山一良2009
12	中京区西ノ京笠殿町 38	2012.05.09~ 2012.09.07	堀を検出。幅14m以上、 深さ2m。土塁基底の一部 も検出。		高橋 潔・モンベティ恭代 2014
13	下京区小稲荷町22- 21ほか	2013.04.15~ 2013.08.12	17世紀前半に付け替えた 土塁を検出。幅4m以上。		近藤章子ほか2014
14	上京区馬喰町・北町	2013.06.03~ 2013.08.09	土塁と石組暗渠を検出。 土塁は幅約17m。暗渠長 は19.3m。		北野天満宮・(財)京都市 埋蔵文化財研究所2013

※ 御土居跡地と考えられる地点の調査はこれ以外にもあるが、関連する遺構が検出されたものに限定した。

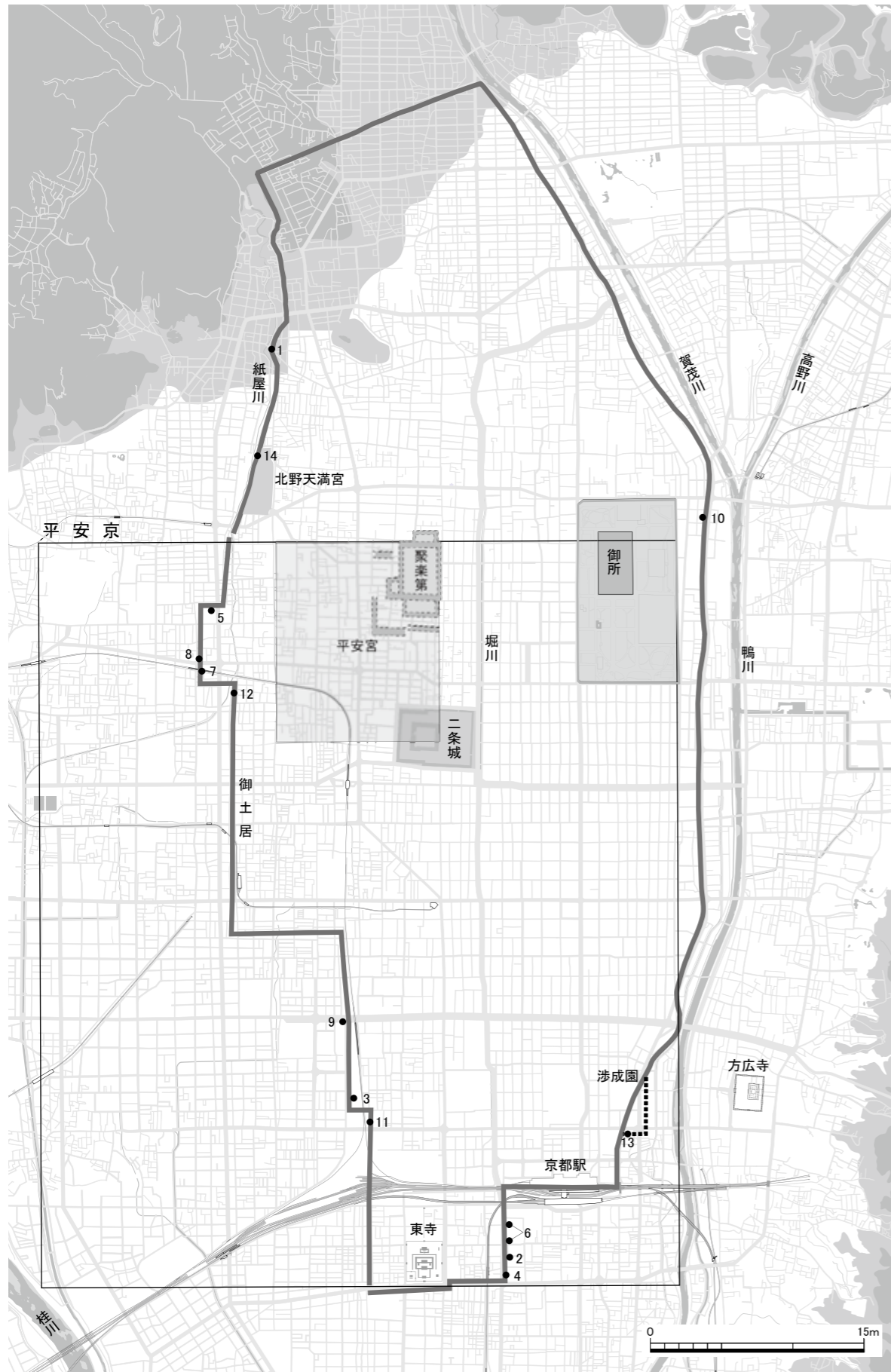


図1 御土居調査地点位置図 (1 : 40,000)

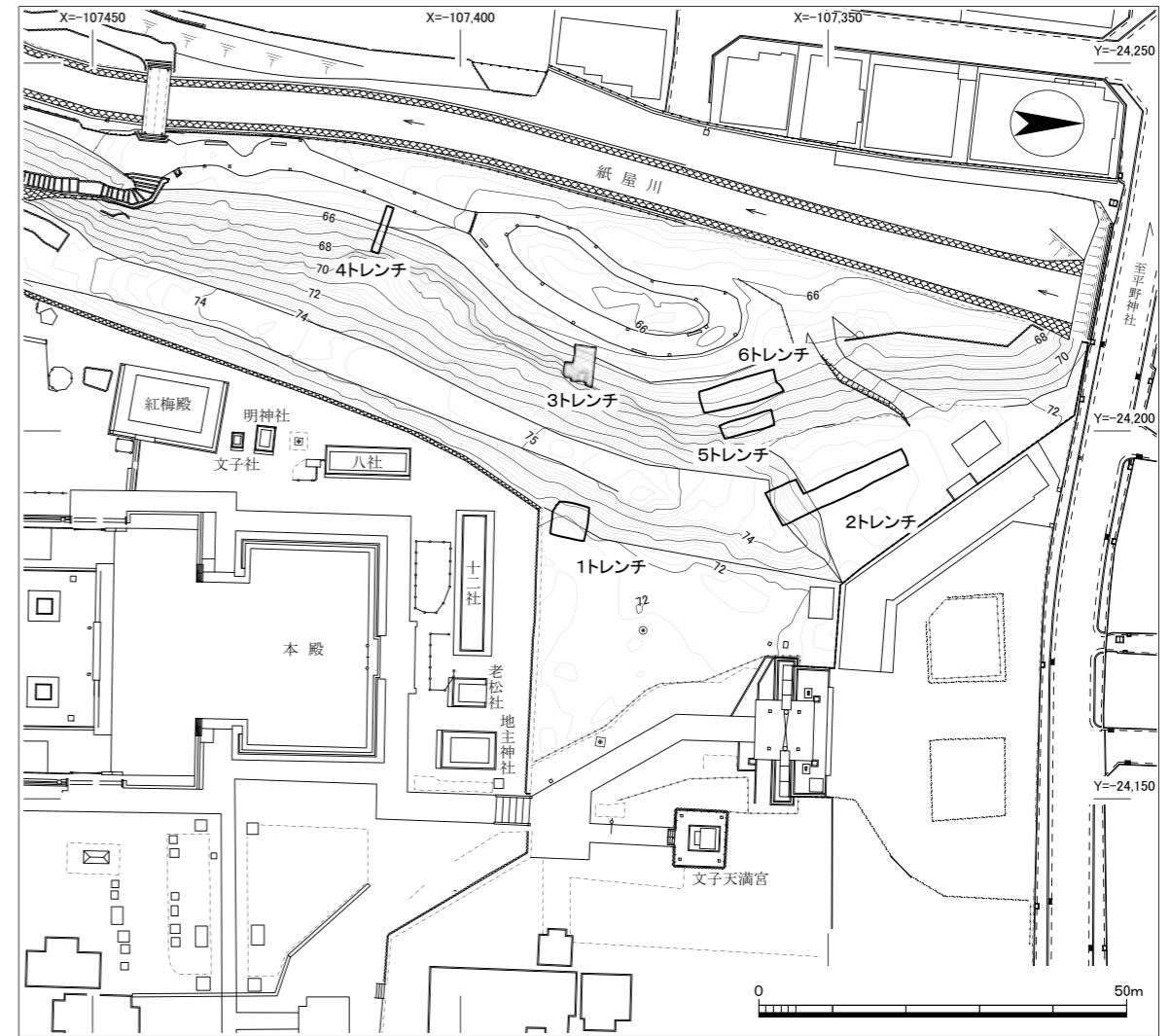


図2 調査区配置図 (1 : 1000)

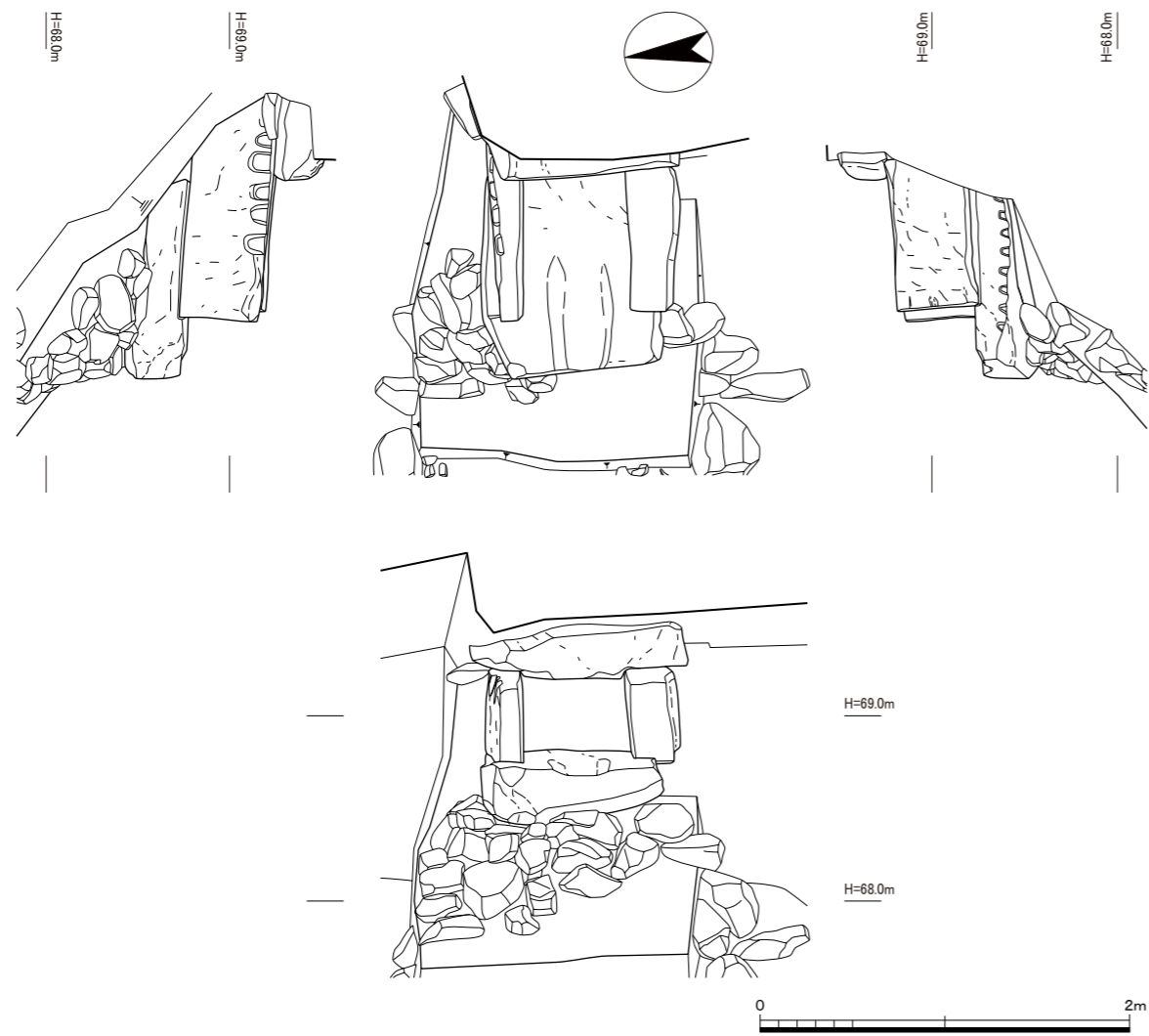


図3 暗渠5排水口・石積み10実測図(1:40)

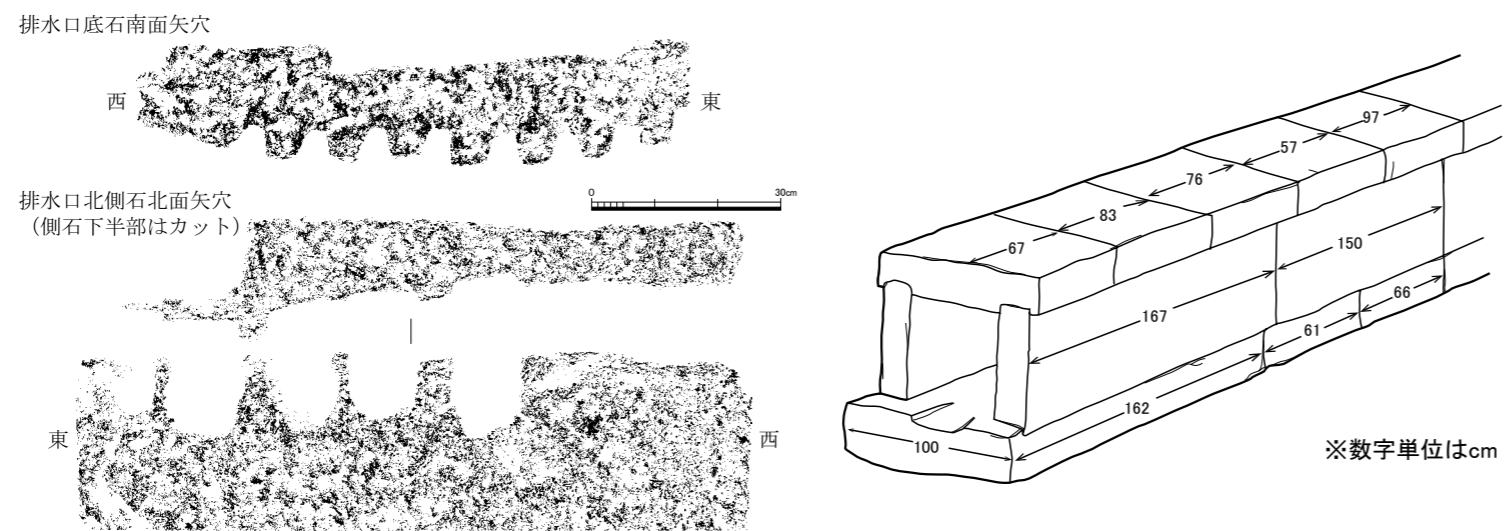


図4 暗渠5排水口矢穴拓影図(1:12)

図5 暗渠5排水口模式図

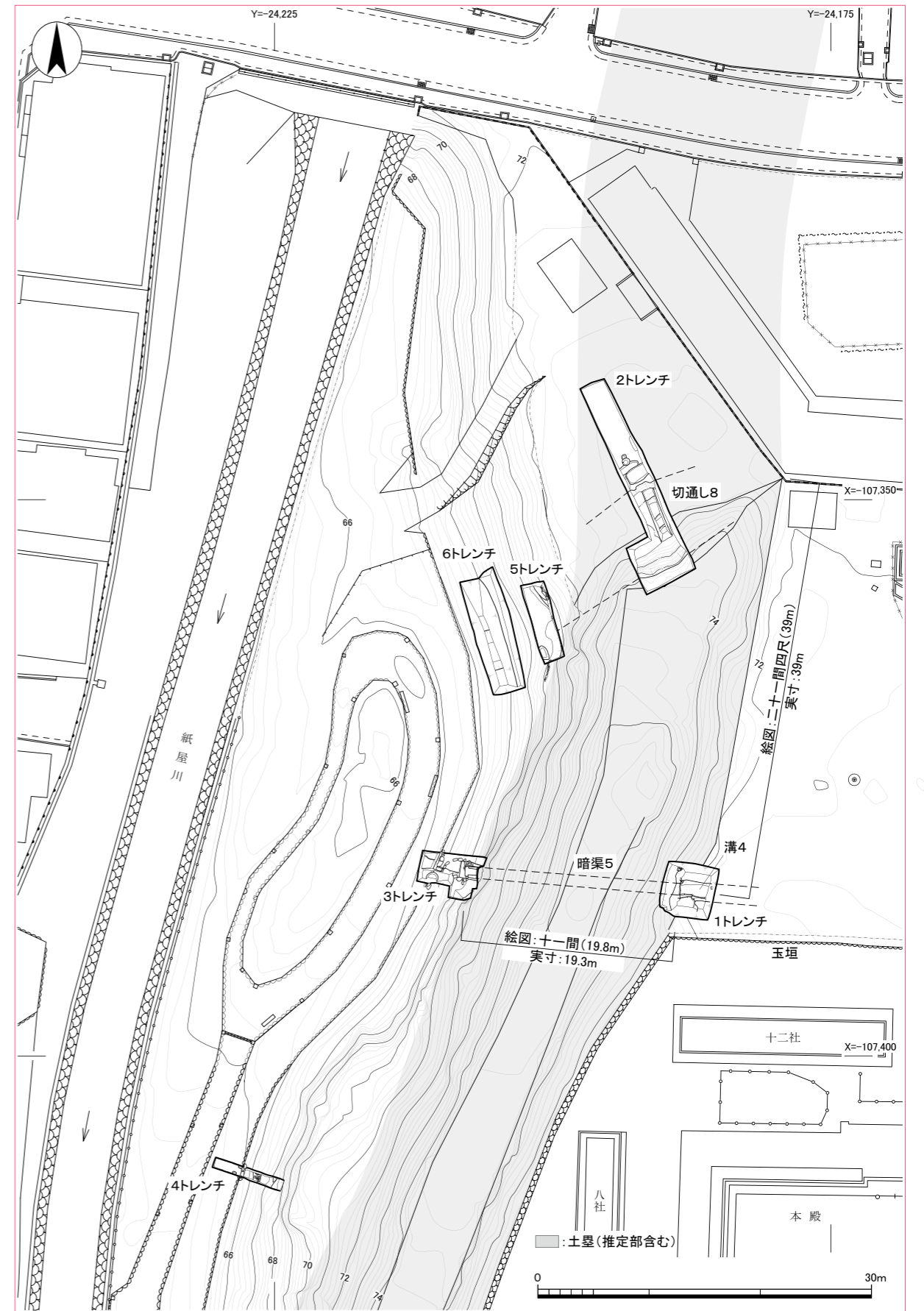
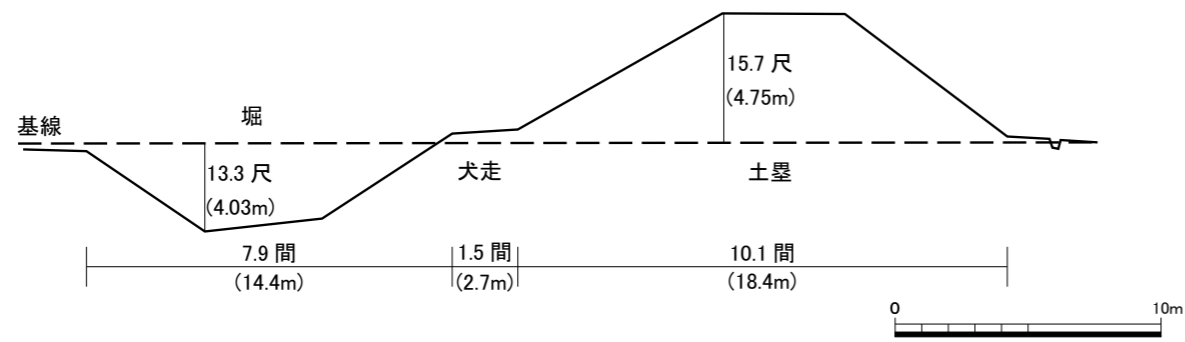
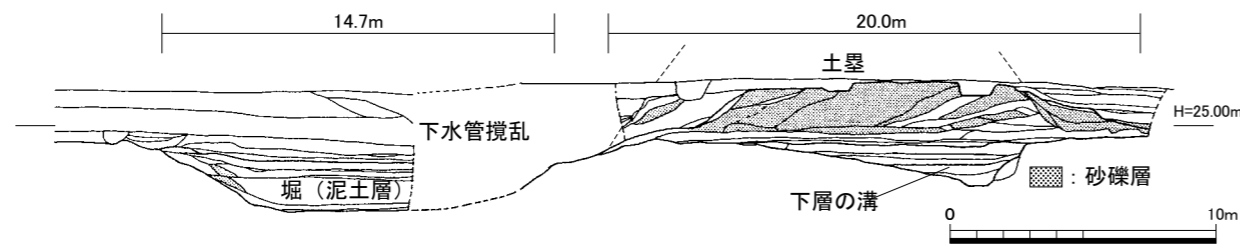


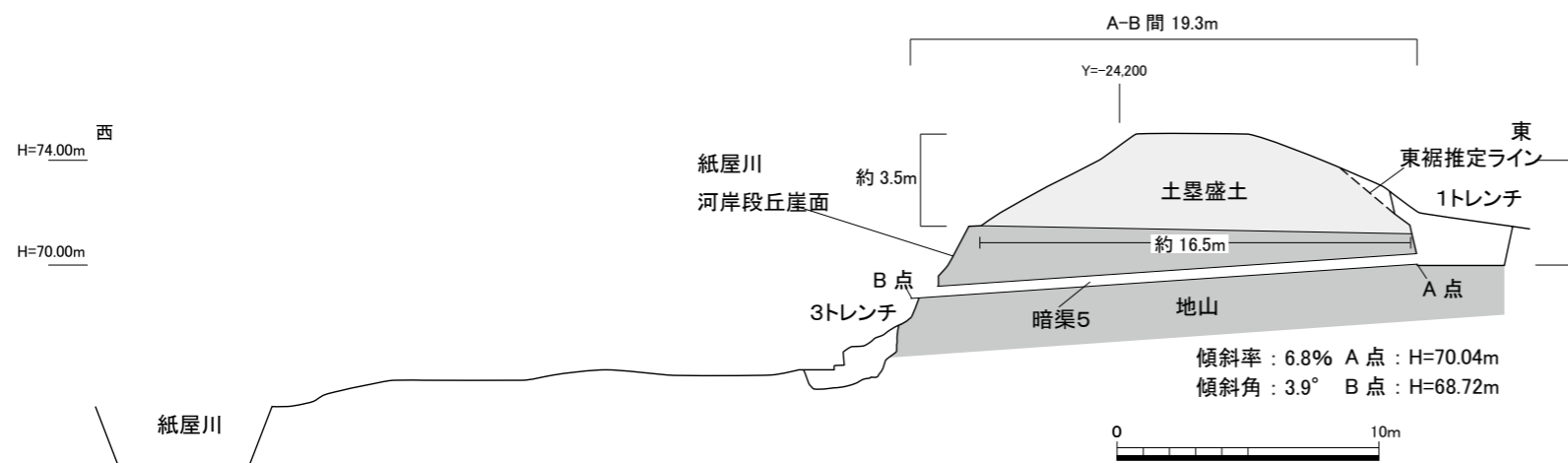
図6 遺構配置図(1:500)



野口町（調査1）御土居断面模式図（1：300）



下京区朱雀堂の口町（調査3）御土居断面図（1：300）



北野天満宮（調査14）御土居断面模式図（1：300）

図7 御土居断面模式図（1：300）